

# 『讚美歌21』の英語讚美歌と

## アメリカ・カナダの現代歌集

横 坂 康 彦

はじめに

ある賛美歌集の「現代性」を問うためには、新しい創作賛美歌と伝統的な賛美歌とがその歌集の中でどのように共存しているのかをまず知らなければならぬ。だが多くの場合この前提は見過ごされ、創作賛美歌における表現の斬新さやその是非についてのみに議論が集中しがちである。日本キリスト教団の『讚美歌21』（一九九七年）が出版されて十年近くが経過しようとしているが、現にこの共存の実態についてはほとんど論じられてこなかった。

筆者はかねてから、アイザック・ウォッツの時代に始まって十九世紀末に至る伝統的な英語賛美歌が、二十世紀に生まれた多くの優れた創作賛美歌によってどのように淘汰されてきているかに関心があり、この問題についていくつかの試みをしている。それはまず、過去二十数年間にさかのぼり、ヒム・エクスプロージョン（拙著『現代の賛美歌ルネサンス』日本キリスト教団出版局、二〇〇一年を参照）の作品が顕著になり始めた時

代以降のアメリカの代表的な賛美歌集において、ウォッツから十九世紀末までの英語賛美歌の収録状況を調査したことである。これは、典礼を重視する教派と比較的自由な教派の歌集とを選び、それらにおける基本レパートリーをまずアメリカの主だった教派における現代歌集七種との比較で割り出してみようという試みである。ウォッツ以降の作品が対象であるのに、なぜアメリカの歌集なのであろうか。それは、英語圏の現代歌集においてアメリカの歌集が群を抜いて創作賛美歌を採用してきたからであり、淘汰の状況が顕著に反映されているのではないかと考えたからである。そこで、典礼的な教派としてアメリカ聖公会を、自由な教派として合同メソジスト教会を選び、それぞれの伝統と現状とを調査した。前者については「音楽史のなかの英語賛美歌——二十一世紀に歌い継がれる基本レパートリーをめぐる——」（『モーツアルティアーナ・海老澤敏先生古希記 念論文集』東京書籍、二〇〇一年）に、また後者については「二十一世紀に歌い継がれる英語賛美歌——アメリカ合同メソジスト教会の賛美歌を基準として——」（『新潟大学大学院現代社会文化研究科』比較宗教思想研究』第五号、二〇〇四年）に、それぞれまとめられている。

### 一、アメリカの現代歌集における英語賛美歌の淘汰

これらの調査からわかったことは、第一に、定番としてゆるぎないと考えられてきたチャールズ・ウエスレーの賛美歌を初め、スタンダードと思われるきた英語賛美歌の淘汰が、実はかなり進んでいることである。

アメリカ聖公会と合同メソジスト教会で、今日に生き残るウエスレーの賛美歌を合わせると四十七編に上る。しかし、これらが長老派や改革派などの教派でも共通して歌われる普遍性のあるレパートリーかどうかとなると別問題である。前述の調査ではぐんと絞られ、八編程度しかない。それらは「Come, thou long-expected Jesus

「久しく待ちにし」(235) 'Hail the day that sees him rise 「たたえよ、この日」(337) 'Hark! The herald 「聞け、天使の歌」(262) 'Jesus, Lover of my soul 「わが魂を愛するイエスよ」(456) 'Love divine, all loves excelling 「おめなるよさるひ」(475) 'O for a thousand tongues to sing 「世にあらかきりの」(4) 'Rejoice, the Lord is King! 「主をあがめよ」(572) 'Ye, servants of God 「こゝろを、み声きけ」(401) などである。(文中のカッコに示された数字は歌集のタイトルがない限り『讃美歌21』の番号であり、日本語訳のある詞のみ日本語初行が並記されている。)つまり、これら八編以外はアメリカ聖公会や合同メソジスト教会に固有の用途で使われているにすぎないか、もしくは教派的にごく限られた接点しか持たない歌なのである。

それに対し、英語賛美歌の先駆者であるアイザック・ウォッツの作品は教派を超えた定着ぶりを示しており、二十一世紀にも十分生き残っていく可能性があると考えられる。彼の歌はアメリカ聖公会を中心とした調査では一五編挙げられており、そのうち When I survey the wondrous cross 「栄えの主イエスの」(297) や Jesus shall reign where'er the sun 「日のてるかざりは」(『讃美歌』一九五四—220) などを含む十編は、調査対象となった七歌集のほとんどすべてに収録されて、今日でも高い採用率を示している。メソジスト教会からはさらに四編が加わるが、そのうち Alas! And did my Savior bleed 「ああ主は誰がため」(298) と I'll praise my Maker while I've breath の二編は他の複数教派の歌集にも採用されており、とりわけ前者はローマ・カトリック教会以外のすべての歌集に収録されている。だが、同じウォッツの歌でもすでに役割が終わったと考えられているものもあり、Am I a soldier of the cross 「我こそ十字架の」(『讃美歌』一九五四—384) はバプテスト派と接点があるのみであるし、浦賀に入港したペリーの船上で歌われた Before the Lord's eternal throne 「はななくかしん」(『讃美歌』一九五四—5) も、アメリカの現代歌集からは完全に姿を消している。

このような淘汰は他の作者の作品でも進んでいるが、その要因として挙げられるのは、軍隊や戦いのイメー

ジ(表現)を持つ賛美歌が現代歌集から削除される傾向にあること、現代の賛美歌作者たち、とりわけヒム・エクスプロージョンの作者たちによって取り上げられているテーマを共有する伝統的な賛美歌は新作に置き換えられる傾向にあること、聖書の文脈を生かす *Biblical hymnody* (拙著『*Biblical Hymnody*』の多様性——二十世紀後半以降の英語賛美歌を中心に——『日本の神学』43、二〇〇四年を参照)の台頭が著しいこと、などである。また、「一つの賛美歌にテーマは一つ」という新しい賛美歌に共通する創作スタイルが細分化された現代歌集の賛美歌分類と合致して、新しい歌が採用されやすくなっていることも無関係ではない。詳細は前掲論文にゆずるが、アメリカ国内の数種の歌集と比較しただけでも英語賛美歌の採用実態にはかなりの変化があることがわかる。

## 二、アメリカとカナダの現代歌集に共通する『讚美歌21』の収録歌

次に『讚美歌21』に視点を移し、この歌集にある英語賛美歌が英語圏の現代歌集とどれほどの接点を持っているかを考察したのが『讚美歌21』と二十一世紀(日本キリスト教団出版局編『日本のキリスト教芸術』第一巻、二〇〇六年四月出版予定)である。具体的には『讚美歌21』の原歌詞初行索引に挙げられている賛美歌が、アメリカとカナダの幅広い教派の現代歌集二十二種においてどのように収録されているのかを調査・考察したものである。その結果、*Amazing Grace!*「くすしきみ恵み」(451)と *Immortal, invisible*「人の目には」(360)が全歌集にあるなど、ひと世代前からは想像できないような実態が浮かび上がってきた。次いで、*Crown Him with many crowns*「小羊をばほめたたえよ」(358)「For all the Saints」(ハ)の世にあかし立つ」(379)「Hark! the herald angels sing」(聞け、天使の歌」(262)「Holy, holy, holy, Lord God almighty」(聖なる聖なる」(351)「Love

divine, all loves excelling」「あめなむをよむ」 (475) 'The Church's one foundation 「主は教会の基となり」 (390) などの三十四編が続く。採用度の高い賛美歌の中に、プラット・グリーンやジェフリー・ローソン、またティモシー・ダドウリー・スミスなど現代の賛美歌作者たちの作品も含まれており、新しい創作賛美歌の予想を超える健闘ぶりも反映されている。

### 三、アメリカとカナダの現代歌集と接点の無い『讚美歌21』の収録歌

さて問題なのは、『讚美歌21』にある英語賛美歌で、これら二十二種の現代歌集に収録されていない歌、つまりアメリカとカナダの広範囲な現代歌集と接点の無い歌は一体どれくらいあるのかということである。賛美歌集とは、それぞれの国や文化の違い、また教派的背景や教会の成長などが如実に反映されるものであるから、個々の歌集が分類や収録歌に至るまで異なっているのは当然である。だが、キリスト教の伝来初期の時代から日本人の信仰生活に大きな影響を及ぼし、また現在に至るまで深く関わっている英語賛美歌が時代を追ってどう変化してきたのか、そして『讚美歌21』がそれとの関連でどこにいるのかを知ることが、日本における賛美歌の将来を考える上で重要な手掛かりの一つである。そこで本稿では、『讚美歌21』に収録されている英語賛美歌でこれら二十二歌集に採用されていないものについて考察を進めたい。

最初に、調査対象歌集となった二十二歌集の一覧を掲載する。

- 1 *Lutheran Book of Worship* (アメリカ・ルター派) Augsburg Publishing House, Minneapolis and Board of Publications, Lutheran Church in America, Philadelphia, 1978.

- 2 *The Hymnal 1982* (アメリカ聖公会) New York : The Church Hymnal Corporation, 1985.
- 3 Erik Routley, ed., *Rejoice in the Lord* (無教派) Grand Rapids MI : Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1985.
- 4 *Worship* (ロープ・カトリック教会) Chicago : GIA, 1986.
- 5 *Psalter Hymnal* (アメリカ改革派) Grand Rapids, MI : CRC Publications, 1987.
- 6 *The United Methodist Hymnal* (全国メソヂスト教会) Nashville, TN: The United Methodist Publishing House, 1989.
- 7 Donald Hustad, ed., *The Worshiping Church : A Hymnal* (無教派) Carol Stream, IL : Hope Publishing Company, 1990.
- 8 *Trinity Hymnal, rev.*, (ホーントックス長老派・アメリカ長老派・改革派系) Atlanta & Philadelphia : Great Commission Publications, 1990.
- 9 *The Presbyterian Hymnal* (アメリカ合衆国長老派) Louisville, KY : Westminster / John Knox Press, 1990.
- 10 *Sing His Praise* (無教派) Springfield, MO : Gospel Publishing House, 1991.
- 11 *The Baptist Hymnal* (南メソヂスト派) Nashville, TN : Convention Press, 1991.
- 12 Rowthorn & Schulz-Widmar, ed., *A New Hymnal for Colleges and Schools* (無教派) New Haven & London : Yale University Press in association with the Yale Institute of Sacred Music, 1992.
- 13 *Singing the Living Tradition* (ゴリトリアム・ゴリヴァーサリウム) Boston, MA : Beacon Press, 1993.
- 14 *Christian Worship : A Lutheran Hymnal* (カイヌクロンソ福音主義ルター派) Milwaukee, WI : Northwestern Publishing House, 1993.
- 15 *Journey Songs* (ロープ・カトリック教会) Portland, OR : OCP Publications, 1994.

- 16 *Catholic Book of Worship III* (ローマ・カトリック教会——カナダ) Ottawa, Canada : Canadian Conference of Catholic Bishops, 1994.
- 17 *Worship Together* (メノナイター・ブレthren) Fresno, CA : General Conference of the Mennonite Brethren Churches, 1995.
- 18 *The New Century Hymnal* (合同キリスト教会) Cleveland, OH : The Pilgrim Press, 1995.
- 19 *Moravian Book of Worship* (モラヴィア派) Bethlehem, PA : Moravian Church in America, 1995.
- 20 *Chalice Hymnal* (キヤサイプル派) St. Louis, MO : Chalice Press, 1995.
- 21 *Common Praise : Anglican Church of Canada* (カナダ聖公会) Toronto, Canada Anglican Book Center, 1998.
- 22 *Worship and Rejoice* (無教派) Carol Stream, IL : Hope Publishing Company, 2001.

ここにはアメリカの各教派の主要な歌集が網羅されており、そこにカナダの典礼的な教派の歌集が加えられている。もちろん子供のための賛美歌集や個人歌集、またプレス・コーラス系の楽譜集などは含まれていないが、『讃美歌21』の収録歌を照らし合わせるには十分である。以下に『讃美歌21』の収録歌の中で調査対象歌集と接点の全く無いもの三十六編をリストアップしてみる。

- Cast thy bread upon the waters 「むへんをばなせむ」 (566)  
 Give your best to the Master 「おみのたまゆふこと」 (515)  
 I will sing for Jesus 「はめたたえよん」 (464)  
 In his steps I follow 「まにまにゆかむ」 (507)

- In some way or other 「わが行くみち」 (463)
- Lead kindly Light, 「やよこゝ道」 (460)
- True-hearted, whole-hearted 「み恵みを受けた今」 (536)
- All nature's works His praise declare 「ちよつとのみち」 (225)
- Bright and joyful is the morn 「イホスは生まれた」 (266)
- Fill us with the Father's love 「心に愛を」 (88)
- God is the refuge of the saints 「神はわが力」 (457)
- It fell upon a summer day 「カリライヤの村を」 (105)
- Lord, we come before Thee now 「神よ、みかへし」 (500)
- My soul, praise the Lord! 「主をほめよ わが心」 (355)
- O holy Lord, our God 「羊飼いの羊飼よ」 (97)
- O love divine and golden 「うのちとひかりたもろ神よ」 (101)
- O Thou Whose feet have climbed life's hill 「若さ日の道を」 (552)
- O where are kings and empires now 「建たつた崩れぬ」 (395)
- Still, still, with Thee 「あやなせよちかたじけなく」 (211)
- The Lord our God is clothed with might 「力に満ちたる」 (357)
- This is the day of light 「今日は光が」 (205)
- Walk in the light: so shalt thou know 「光のある間」 (502)

What grace, O Lord, and beauty shone 「恵みにかがやせ」 (288)  
Ye fair green hills of Galilee 「さよふのやぶかき」 (289)

Father welcomes all his children 「神はそのこころにきたり」 (69)  
For the man and for the woman 「女と男と知性と愛と」 (420)  
Still, I search for my God 「ああ、美しい自然」 (427)  
This land of beauty has been given 「美しい大地は」 (424)  
Hope for the Children 「わがこどもたちか」 (371)  
Pray that Jerusalem may have 「平和を求めよ」 (578)  
Serve the Lord with holy fear 「民よ、主に仕えよ」 (114)  
My soul in silence waits for God 「わが魂、黙して」 (136)  
The Good Shepherd 「小羊をつかひなせ」 (200)  
Tomorrow Christ is coming 「キリストは明日おこひびとなる」 (244)  
We bring these our gifts 「今をなげなせ」 (65—1)  
I feel the winds of God today 「み神の風をうけ」 (557)

これらの歌が調査対象歌集と接点が無いのは何故であろうか。推測される理由ごとに大まかに四つのグループに別けてみた。

まず「むくいをのぞまむ」に始まる最初の七編は、福音唱歌かそれに類する歌である。福音唱歌は近世の賛

美歌史上、明らかに特異な位置を占めており、信仰復興運動との関連から生じたその個人的、主観的な表現への評価は分かれている。その背後には現代アメリカを中心とするプロテスタントの二大勢力の拮抗があるが、聖公会、長老派、改革派、会衆派、ルター派などの公認歌集では福音唱歌や十九世紀の賛美歌自体が減って、単旋律聖歌からコラールや詩編歌までの歴史的賛美歌遺産に回帰する傾向が見られる。その反面、メソジストやバプテストの歌集にはまだ福音唱歌が多く残されているのが実情である。その実態については昨年度のこの紀要でも触れたが、ここに挙げられた七編はそのメソジスト歌集にもバプテスト歌集にも無い。「わが行くみち」のように、英語賛美歌集自体にすでなく、古いアメリカの歌を集めた文献 (American Hymns Old and New, New York: Columbia University Press, 1980) に見出せるものや、「ほめたたえよう」のようにそれにさえ見当たらない歌もあり、これらを含む七編の役割は終わつたと判断されても無理はない。とりわけ「わが行くみち」は『讚美歌』(一九五四)の時代から日本キリスト教団の歌集を用いている教会では好んで歌われていたので(日本キリスト教団出版局讚美歌委員会「アンケート調査に見る現行『讚美歌』使用状況」、『礼拝と音楽』第七十二号、一九九二年)、このギャップは大きい。だがメソジストやバプテストは福音唱歌やそれに類するスタイルの歌を用いなくなったというのではなくて、例えば歌集6には Emmanuel, Emmanuel, his name is called Emmanuel といったモダン・ゴスペルが採用されるなど、古い福音唱歌を脱ぎ捨て、感情的な側面だけを取り出してそのまま現代の感覚で表現する方向へ移行したと見る方が、実態に即している。

第二のグループは、内容や表現が時代にそぐわないと判断されて、同じテーマを扱った他の(新作)賛美歌と置き換えられた可能性のあるものである。

これらは、「すべてのものらよ」から「みどりもふかき」までの十七編である。もちろん明確な理由はわからないものの、内容を個々に検討していくとそれぞれの問題点が浮かび上がってくる。

どの歌集でもクリスマススのセクションは充実しているが、最近は特に、優れたドイツ語賛美歌の *Du Kind, zu dieser heiligen Zeit* 「この聖き夜に」や、民族色豊かな *Erstmalton de tsoune, Jesus alahomia* 「小鳥も飛び去る冬のやなか」*Duemele, Nino lindo* 「おやすみなさう」*De tierra lejana venimos* 「遠くを離れて遠く」など、単にクリスマススの喜びを歌うだけでなく、その歌が書かれた文化的背景や現代に生きる人々にとってのクリスマススの意味などを伝える歌が増えている。また音楽も魅力的であり、四分の五拍子で瞑想的な *DU KIND, ZU DIESER HEILIGEN ZEIT* や素材ながら流麗なフランス民謡の *UNE JEUNE PUCELLE* またヒスパニックの子守唄である *ALARU* やハバナのリズムを生かした *ISLA DEL ENCANTO* など、特徴のはっきりとした個性的なセティングが多い。そのような中で、ごく一般的なクリスマススの喜びが歌われている「イエスは生まれた」が姿を消したとしても無理はない。

アイザック・ウォッツの「神はわが力」は、今回の調査対象歌集に収録されていないのみならず、前述の二つの調査でも全く出てきていない。現代歌集におけるウォッツの作品の変遷の中で、完全に消えてしまったようである。その背景には、この歌が詩編四十六編に基づいて書かれている事実が、詩編を題材とする歌は詩編歌として正面から歌う伝統が復活している現代歌集においてはマイナス要因として働き、収録の意味が無いと判断されたのかもしれない。日本では広く歌われているだけに二十二歌集とのギャップは大きい。

「ガリラヤの村を」は、マタイによる福音書に基づいてストーリーが補強され、子どもを祝福するイエスを歌う独創的な賛美歌として『讚美歌第二編』(1967)から『讚美歌21』に受け継がれている。幼児祝福や幼児洗礼のための賛美歌は英語歌集においても少なく、調査対象歌集ではヒム・エクスプロージョンの賛美歌作者であるプラット・グリーンの *Little children, welcome!* や、やはり現代の作者コルターナーの *Child of blessing, child of promise* 「聖霊のしるし」など新しいものが用いられる傾向にある。また多彩な *Biblical hymnody* の台

頭によつて存在感が薄れたとしても不思議ではない。この歌はイギリス国教会の大説教家で後にユニテリアンに転じたストッフオード・ブルックによつて書かれており、二十世紀のイギリス歌集三十七種のうち七種にはあるが、国教会との結びつきが強くてアメリカでは逆に普及しなかつたのかもしれない。

また按手礼や就任式のための「羊飼いの羊飼いよ」も、同じテーマによる優れた作品が近年増えており、カール・P・ダウ Jr の *God the Spirit Guide and Guardian* やマイケル・ペリーの *How shall they hear the word of God*、またルース・ダックの *You are called to tell the story* などが採用されるようになった。按手礼のための賛美歌では各教派による解釈の違いも表面化するようになり、*God of the prophets* 「恵みあれしもべらに」などのように現代の作者によつて手直しされる例も出てきている。その点「羊飼いの羊飼いよ」は、一般的で大らかな表現によつて「献身」が歌われており、さまざまな教派が『讚美歌21』を使う日本ではかえつて生き残る可能性のある賛美歌ではないだろうか。

結婚式の歌では、ブライアン・レンの *When love is found* 「愛する二人に」やラッセル・シユルツの *Your love, O God has called us here* などが採用されるようになり、古典の *O perfect Love, all human thought transcending* 「全き愛 与える主よ」との板挟みになった「いのちとひかりたもう神よ」が消えている。『アンクル・トムの小屋』の作者であるハリエット・ストウの書いた「あさかぜしずかにふきて」も、一八五五年のプリマス賛美歌集に収録されて以降一時は普及したようだが、調査対象歌集からは完全に消えてしまった。また、信頼や服従の歌としてはキャサリン・トマーンソンの *I want to walk as a child of light* 「光の子になるため」が調査対象歌集の五種に採用されるなどの定着ぶりを見せ、「光のある間に」は詞も曲も隔世の感がある。

第三のグループは、「神はそのひとり子を」から「わが魂 黙して」までの八編であり、本稿では考察できない作品群である。その理由は、最初の五編はアジアやオーストラリアなどの歌集から採られた創作賛美歌であ

り、合同メソジスト教会のアジア増補版歌集やOCAの歌集が対象歌集にないこの調査では実態がわからないからである。後半の三編は、詩編歌、もしくは詩編を題材とした歌であり、さまざまに手が加えられているので考察が困難なものである。

第四のグループはその他である。「小さいひつじが」と「まごころこめ」は「こどもさんびか」からの共通歌としてそのまま受け継がれており、「み神の風うけ」は、現代の教会歌集にはほとんど無い「学校」をテーマとする歌なので、これ以上の考察は意味がない。ただし「ともにもうたおう」(一九七六)から受け継がれた「Tomorrow Christ is coming」「キリストは明日おいでになる」が二十二歌集に全く見当たらない事実は興味深い。この歌はフレッド・カーンの初期の作品であり、日本に入ってきたヒム・エクスプロージョンの賛美歌の草分けである。このアドヴェントの賛美歌は、「キリストは昨日来られたように明日もまた来られる、私たちの日常生活の中にキリストはいつでもいる。その福音を伝えるために私たちを用いられる」という内容で、福音と現代とを結び付けるカーンの作風を顕著に反映しているが、この調査を見る限り主要な歌集で普及する事はなかったようである。

次に、前述の四グループごとに、調査対象歌集の一種類から三種類にある歌までの順でリストアップしよう。【一】に示された数字はその歌を採用している歌集の番号である。

Hover o'er me, Holy Spirit! 「聖霊よ、降りて」(343) 【10】

Asleep in Jesus! Blessed sleep 「眠れ、主にありて」(108) 【14】

God of the nation, near and far 「平和を求めて」(561) 【12】

- Herald of Christ 「キリストの使者なれ」 (534) 【6】  
 I would be true 「真実に清く生きたる」 (520) 【18】  
 Lift your glad voices in triumph on high 「喜びの民よ、高く喜び」 (327) 【10】  
 Master, no offering 「主よの香油」 (567) 【18】  
 My faith, it is an oaken staff 「信仰の杖、旅路を」 (458) 【18】  
 Not worthy, Lord, to gather up the crumbs 「主よ、我らに屑をばらまかれ」 (77) 【8】  
 O Jesus, Thou art standing 「よき人の外に」 (430) 【8】  
 Safely through another week 「七日の旅路」 (206) 【8】  
 Softly now the light of day 「日なき朝の光」 (220) 【8】  
 The Christ who died but rose again 「死に勝利せられた」 (450) 【10】  
 The Lord is King! Lift up thy voice 「主よの御名を」 (16) 【3】  
 The Spirit breathes upon the Word 「聖霊のみことばの神の御名を」 (54) 【8】  
 Thy way, not mine, O Lord 「主よ、おのれを」 (504) 【8】  
 Give us the wings 「御心のつばさよ」 (380) 【2, 12】  
 Go, labor on; spend, and be spent 「働いていられ」 (565) 【8, 14】  
 Hark! the song of Jubilee 「聞けよ、主の民」 (577) 【3, 19】  
 I'd rather have Jesus 「キリストにはかえられませぬ」 (522) 【10, 11】  
 My God, accept my heart 「わが心を、受けよ」 (94) 【2, 18】  
 O for a heart to praise my God 「お神をたたえぬ心よ」 (492) 【3, 6】

- The Son of God goes forth to war 「正義の主ーキリスト」 (535) 【1, 8】  
 There's a land that is fairer than day 「信じて仰るべき」 (111) 【10, 11】  
 All praise to you, O Lord 「慈愛なる主ー神」 (286) 【1, 2, 19】  
 Awake, arise, lift up your voice 「目覚めよ、歌えよ」 (329) 【2, 12, 21】  
 Blow ye the trumpet, blow 「響けよ、吹ひよかせ」 (431) 【6, 8, 12】  
 God, who touchest earth with beauty 「美しう大地の神」 (514) 【11, 17, 21】  
 Great God, we sing that mighty hand 「偉大な主神」 (367) 【3, 9, 12】  
 Hail to the Lord who comes 「おん主の臨みよせ」 (282) 【1, 2, 4】  
 Lift up the gates eternal 「心高く、アブラハムの扉」 (123) 【17】  
 My soul doth magnify the Lord 「おほなる主を」 (178) 【1】  
 Within Your shelter, loving God 「主はむなかへれた」 (142) 【9】  
 I waited for the Lord my God 「私の神を」 (129) 【3, 8】  
 O God in heaven 「天の神、祈りよせ」 (354) 【6, 18】  
 By the Babylonian rivers 「バビロンの流るる」 (164) 【3, 4, 9】  
 Be merciful to me 「おわれみをたまへ」 (135) 【5】  
 Here am I 「ここに参らば」 (563) 【20】  
 I want a principle within 「神を感する」 (523) 【6】

- "Lift up your hears!" 「心を高くあげよ」 (18) 【18】  
 Lo! What a cloud of witness 「証し人の群れ」 (383) 【2】  
 On the day of resurrection 「よみがえりの日」 (334) 【6】  
 Sing now with joy unto the Lord 「よびよりの歌を」 (187) 【2】  
 Speak forth Your word, O Father 「父の御言葉を」 (408) 【5】  
 Stay with us 「共に居てくださる」 (89) 【21】  
 The Desert shall rejoice 「荒れ地も喜び」 (173) 【9】  
 The sinless one to Jordan came 「罪なき神の子」 (277) 【2】  
 Over the chaos of the empty waters 「神の御水」 (330) 【2, 4】  
 Praise the Spirit in creation 「天の御霊を」 (347) 【2, 4】  
 Songs of praise the angels sang 「天使の賛歌」 (15) 【2, 14】  
 To a maid engaged to Joseph 「マリアのさすね」 (190) 【6, 9】  
 To God with gladness sing 「神に喜ばるる賛歌」 (20) 【2, 4】  
 We are one in the Spirit 「御霊に一つ」 (417) 【17, 20】  
 We the Lord's people 「主の民を」 (207) 【2, 12】  
 When Christ was lifted from the earth 「キリストの復活」 (413) 【2, 11】  
 When God delivered Israel 「神の民を」 (158) 【3, 9】  
 Behold a broken World 「破れたる世界」 (373) 【6, 16, 19】  
 Deep were his wounds 「深く傷み流れる血」 (301) 【1, 9, 14】

Herald, sound the note of judgment 「ちびきを伝えよ」(238) [1, 2, 21]

一覽を見てわかるように、このグループの福音唱歌で調査対象歌集と接点の極めて少ないものは「聖霊よ、降りて」の一編だけであり、これをどう解釈するかは視点の別れるところであろう。むしろ重視したいのは「眠れ、主にありて」に始まる次のグループで、ここでは「真実に清く生きたい」「ナルドの香油」「信仰こそ旅路を」「とびらの外に」「七日の旅路」「み神をたたえる心こそは」「信じて仰ぎみる」など、日本では広く歌われている賛美歌も含めて二十七編が挙げられている。とりわけ「主よ、み手もて」は、前述した讃美歌委員会の一九八二年のアンケート調査においてトップから二番目に多い頻度で歌われているから、この隔たりは大きい。もともとこの歌の場合、ウェーバーの〈魔弾の射手〉から採られている旋律が日本では学校教育に用いられていた経緯があり、教会とは無関係な人たちと広く接点があるため伝道集会などでも用いられやすく、そのあたりが調査対象歌集とは大きく実情が異なっている。意外なことは、二十世紀の前半に作られ、日本では『讃美歌第二編』(1967)に収録されて以来アンセムなどとしても歌われている「キリストにはかえられません」が、南バプテスタ派の歌集11と無教派の歌集10にしかないということである。ただしこの歌は、音楽的に見れば現代風な福音唱歌であり、一九六〇年までにピース楽譜で百万部売れたと伝えられていることから、賛美歌というよりむしろ独立した宗教歌、または合唱曲として普及している可能性がある。

二十世紀後半の創作賛美歌は、統計上ではどうしても調査対象歌集と接点の少ない歌として浮上してしまいが、逆にこれらの歌が、少しずつではありながら教派的な広がり勝ちを得ている点に、今後の将来性を見いだしたい。これらの歌の肯定的な面は、前述の『讃美歌21』と二十一世紀に譲るが、例えば「剣をたたいて鋤にかえよ、槍を打ち直し 鎌をつくれ」など独創的な表現を伴うダドゥリー・スミスの「戦い疲れた民に」

が、合同メソジスト教会（歌集6）とカナダのカトリック教会（歌集16）、さらにモラヴィア派（歌集19）など、全く背景の違う教派を跨いで歌われている点は見逃してはなるまい。

以上、『讃美歌21』の収録歌のうち、アメリカとカナダの教派を超える二十二の現代歌集と接点のない九十五編の賛美歌を洗い出してみた。これが、英語賛美歌を対象とした場合の『讃美歌21』の「独自性」である。

『讃美歌21』ではドイツ語賛美歌も旧版に比べて倍に増えるなど、英語以外の賛美歌も多彩である。それらの収録歌も調査することによって、その実態にさらに近づいていきたい。